第三話　化け猫

むかしむかし、ある所に水車場がありました。その水車場はこのあたりではなく、どこか上(かみ)の地方にあったのです。けれども、何処にあったとしても、小山の北か、小山の南か、それは妙ちきりんな水車場でした。なにかがそこに出没するときは、幾週間もつづけて、ムギの一粒(つぶ)も挽けませんでした。けれども、一番にひどかったことは、その場所に出没して人を悩(なや)ますばかりでなく、それが大入道(トロールド)か、または他のなにかであるにしても、その水車場を焼いてしまふことでした。聖霊降臨祭の晩に二度も続いて火事があって、すっかり焼けてしまひました。

そこで、三年目に聖霊降臨祭が近づいて来たとき、水車場のすぐそばの主人の家に、主人の日曜着を縫ひに仕立屋が来てゐました。主人は聖霊降臨祭の晩に、――

「さあ、うちの水車場は今年の降臨祭の晩にも火事になるだらうかしら。」と、言ひました。

「いや、なるまい。」と、仕立屋は言ひました。「なるはずがあるものですか、わたしに鍵を渡して下さい。わたしが水車場の番をしませう。」

さあ、主人はそれは勇敢だと思ひました。それで、夕方になって、仕立屋に鍵を渡して水車場に案内しました。此処は新らしい建物でしたから、そこで仕立屋は床の真中に座って、白墨を取り出して、自分のぐるりに円形を書いて、その円のぐるりに、ずっと『主の祈祷』を書きました。それがすむと、もうこはいものはありませんでした、――悪魔がやって来ようとも、こはくはありませんでした。

ところが、真夜中になると、ばあんといふ音をたてゝ、戸が一ぱいに開きました。そして数へきれぬほどの黒猫の一群が現れ、蟻のやうに密集してゐました。間もなく猫は鈩の上に大きい鍋をかけて、その下に火を焚きつけたので、鍋はぶつ〳〵煮え出しました。鍋の中のものは、まるで松脂とタールのやうでした。

「は！　は！　お前たちの計略はそれだな！」と仕立屋は考へました。

かう思ってゐるうちに、一匹の猫が鍋の下に前足を突き込んで、ひっくりか

へさうとしました。
「前足を引込めろ、小猫さん。頬髭(ほほひげ)を焼いてしまふぜ。」
と、仕立屋は言ひました。
「わたしに、前足を引込めろ、小猫さん、といった仕立屋に気を付けろ。」と、その猫がほかの猫にいひました。またたくうちに猫共は鈩(ふろり)のふちから、みんな逃げて行って、円のぐるりで踊(をど)ったり、躍(と)んだりしてゐました。それから、急に前の猫はこっそりと鈩(ふろり)に行って、鍋をひっくりかへさうとしました。
「前足を引込めろ、小猫さん。お前の頬髭を焼いてしまふぜ。」と、仕立屋はまた叫びました。で、また猫共を鈩(ふろり)の椽(ふち)から追ひちらしました。
「わたしに、前足を引込めろ、小猫さん、といった仕立屋に気をつけろ。」と、その猫が他の猫共にいひました。そして、みんな、また円のぐるりを踊(をど)ったり、躍(と)んだりし始めました。それから、また急にみな鍋のところに集って鍋をひっくりかへさうとしました。
「前足を引込めろ、小猫さん。頬髭(ほほひげ)を焼いてしまふぜ。」と、仕立屋は三度目に叫びました。で、こんどは猫をひどく、びっくりさせたので、猫は床の上でひ

っくりかへりました。それから、また前と同じやうに踊ったり躍(と)んだりし始めました。

それから猫は、円のぐるりに近く集りまして、どし〳〵と速い調子で踊(をど)りました。あんまり早いものですから、たうたう仕立屋はめまひがし出しました。猫は、とても大きい、みぐるしい目で仕立屋をみつめて、仕立屋を生きながら一呑みにせんばかりでした。

ところで、猫の群(むれ)が精一ぱい早く踊(をど)ってゐましたとき、たび〳〵鍋をひっくりかへさうとした前の猫が、前足を円の内側に差入れて、仕立屋を爪で引搔(ひきか)かうとする様子でした。けれども仕立屋はそれを見ますと、すぐ鞘(さや)からナイフを引抜いて、身がまへました。その時、猫はまた前足を差入れましたので、とっさにその前足をちょんぎりました。さうすると、猫共はみんなぎゃあ〳〵なきながら、一しょけんめいにずっと戸の外に急いで逃げ出しました。ですが、仕立屋は書いた円のうちに横にねて、朝お日様が床の上にきら〳〵さしこんでくるまで眠りました。それから起きて、水車場を閉めて持主の家へ行きました。

仕立屋がその家にいったとき、水車場の持主と女房とは、聖霊降臨祭の朝な

ものですから、まだ起きてはゐませんでした。
「お早やうございます。」と水車場の主人の部屋に入っていって挨拶の手を差し延べました。
「お早やう。」といって、仕立屋が無事なのを見て、ほんたうに悦びもし、驚いてもゐました。
「お早やうございます、おかみさん。」と、主人の女房に挨拶して握手を求めました。女房は「お早やうございます。」とはいったものの、いかにも元気がなく、いら〳〵してゐました。そして手は蒲団の下に隠してゐましたけれど、しゃうことなく、左の手を突き出しました。
　そこで、仕立屋は事情がはっきり判りました。けれども、主人になんといひましたか、またおかみさんにはどうしましたかは、わたくしはなんにも聞いてゐません。

解説と註

怪物退治説話、化け猫の話は日本にも多く鍋島の猫騒動のやうに演劇や講談種となったものもあるが、民間伝承として雲州松江の小池婆の話が最もこれに近い。

大入道　神話、民話に附きものゝ「トロールド」のことで、悪魔のやうなものではない。丘、山中に一家族でか、或は数多の家族が一緒に住むと想像されてゐる。豪富を蓄へ、住家の内部は黄金や宝石で飾られて、華麗なのを普通とする。人間と友達となって金を貸したり、借りたりもする。あまり利口でなく盗癖があって、金銀財貨ばかりでなく、婦人子供をも盗み去る。騒がしい音を嫌ひ、キリスト教会が出来て、鐘を打ち鳴らすやうになってから、この怪物は大部分駆逐（くちく）されたと思はれてゐる。

聖霊降臨祭　キリスト教会で聖霊の降臨を記念する祭日。復活祭後第七日曜

日となってゐる。（使徒行伝第二章）往昔、ユダヤ人の収穫の祝祭に起源するともいふ。聖霊降臨祭節と称するのは一週間。「白日曜日」と呼ぶことのあるは、この日には受洗者が多く白衣をまとふに因る。

主の祈祷　新約聖書マタイ伝第六章九節及至十三節にある。「天にゐます我らの父よ、願くば、御名を崇められん事を。御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我らの召したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗試に遇せず、悪より救ひ出したまへ。」キリストが弟子たちに示した祷の雛形で、信者が一般に用ひる。